

# 青少年・子どものスポーツ推進に対する行政の取り組み

スポーツコミュニケーションゼミナール 1314029 佐藤 賢

## 1. 研究動機・研究目的

卒論作成にあたり、私が一番重要視したのが、これからの自分に生かせる知識を獲得できるものにしたいということ意識した。来季からは行政からスポーツを考える立場として、自分の勤める静岡県、そして国のスポーツを担っていく子どもたちに対する行政の施策を見つめなおし、課題や展望を確認しておくことは、いずれの自分にとって大きく役立つことになると考えた。我が国では少子高齢化や、子どもの体力の二極化が問題視されている。そのため、今までと同じ施策に取り組むだけでは、これらの問題を抑制するどころか悪化してしまう恐れもある。ある都道府県ではすでにそういった問題を意識した新しい施策を行っている。本研究で新しい施策のノウハウを少しでも学べたら良いと考える。

## 2. 研究方法

本研究で用いた研究方法は、文献研究である。各都道府県のスポーツ推進計画を中心に市役所やスポーツ団体の取り組みにも注目し、どのようなつながりがあるかを確認した。その中で、共通して行われている施策と、独自に行われている施策に注目して取り上げ、段落分けをした構成とした。

## 3. 主な結果と考察

共通して行われている施策では、「指導者の育成」、「総合型地域スポーツクラブの推進」、「障害者スポーツの推進」、「食育による青少年の体作り」に注目した。そして、独自の政策として取り上げたものでは、京都府の「京の子どもダイヤモンドプロジェクト」、「京都府遊びガイドブック」に注目した。まず1つ目に、「指導者の育成」に関して問題に上がったのが、専門的指導者が少なく、より実践的な技術を子どもに教えることが出来ないことや、指導者が部活動を持つことを不安に思っている割合が、体育教師とその他の教師で大きく差が開いていることなどがある。解決策としては、指導力に不安を持つ指導者に、行政が主導となり講習会を開くことや、指導者不足なスポーツ団や部活動に、地域の大学生などで専門的に競技に取り組む人材を派遣するといった、教育機関を巻き込んだ施策を行っていくことが挙げられた。実際に、教育機関と協力した体制は既に行っている都道府県も存在しているが、まだまだ制度化している自治体は少ない。これから、基盤となる指導体制を作っていくことが大切となる。2つ目に「総合型地域スポーツクラブの推進」に関しては、様々な自治体が力を入れて取り組んでいる施策の一つであることが分かった。全国的にも、右肩上がり大きく総合型地域スポーツクラブは増加し、どの都道府県のスポーツ推進計画においても、地域のスポーツ・運動の拠点として考えられている。課題とし

では、法人格を持つクラブがまだ少ないこと、自クラブの資金でのクラブ運営が難しく、行政からの援助がなければならないということ。こういった問題を解決するためには、ただクラブ数を増加させていくだけでなく、その地域のスポーツ環境に適した施設を作っていくことが大切になる。総合型地域スポーツクラブの法人化も同様に、何をもって法人化するのかを吟味し、意味あるクラブ創設を目指していく必要がある。3つ目は「障害者スポーツの推進」である。障害者スポーツは、まだまだ発展途上であり、その大きな要因としては障害者スポーツを行える環境が少ないということが挙げられる。施設面でのインフラ整備や、障害者スポーツを行うための機会、そして指導者不足も問題とされ、これから行政が大きく力を入れていかなければならない。そこで障害者スポーツを普及させることが行政の役割と認識し、神奈川県などでは、健常者が障害者スポーツと触れ合うイベントを定期開催することで解決を図る。4つ目は「食育による青少年の体づくり」である。食育を通し、スポーツや運動の土台となる体を大切にしていくことが、競技力の向上などに大きくつながると考えている。長野県では、地域の飲食店やコンビニエンスストアに協力を仰ぎ、食品に使う原材料に栄養素の多いものを利用することで、身近な部分から食育を意識している。また、給食では地域の野菜などを活用し、子どもだけでなく大人にも実際に食してもらう機会を街の施設やショッピングモールで儲けるなど、より多くの方に食育の重要性を共感してもらえ体制を築こうと努力している。次に、各都道府県が独自に行っている政策に注目すると、京都府では「京の子どもダイヤモンドプロジェクト」や「京都府遊びガイドブック」などの独自の政策を行っている。どちらにも共通しているのが、子どもがスポーツを行う環境に多くの人を巻き込んだ形で、今まで何となくでしか定められていなかった部分を制度化しようと努めているものである。「京の子どもダイヤモンドプロジェクト」では、マイナーな競技において、小学生を対象に専門的な練習を促していくものである。そして、「京都府 遊びガイドブック」では、日常の体の動きや運動を、意識して行うことで競技の動きにつなげていくという取り組みで、様々な動きについて明記していることから、指導者にもわかりやすいものとなるようになっている。

#### 4. 結論

本研究を行っていくと、行政は取り組むべき課題を様々な分野で見つけているが、具体的な制度や対策を一貫化できていないために、子どものスポーツ推進においても各県でばらつきがある。これからは、自治体同士が意見交換を活発に行い、連携を取りやすいものとしていく必要があると感じた。

#### 5. 卒業論文の執筆を終えて

卒論を執筆していく過程で、様々な助言をいただいた伊藤真紀先生に感謝しております。来年からの自身の仕事に生かせるよう努力していきます。